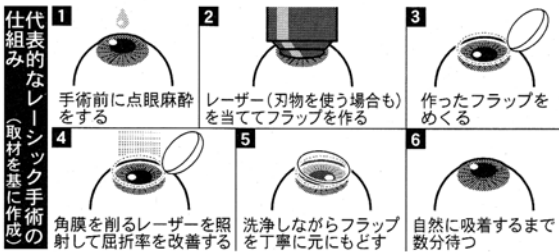


眼鏡やコンタクトレンズが手放せなくなつては20年。現在、裸眼視力は右・0.4、左・0.6。かつては二度落ちた視力は回復できないといわれていましたが、最近はずレーザーで角膜を削るなどの視力矯正手術を受ける人も珍しくなく、社内には経験者も。痛みは？ 視力は本当に回復するの？ 「脱眼鏡」を諦めきれない記者が現状取材しました。(吹田 伸)



レーシックの適応検査。視力だけでなく、角膜の厚さや眼圧など、さまざまなデータを調べる。神戸市中央区京町、レイ眼科クリニック

レーシック手術、年30万件



代表的なレーシック手術の仕組み(取材を基に作成)

覚悟と準備

レーシックとコンタクトレンズにかかる費用を単純計算すると、レーシックはコンタクトより10年分ぐらいの費用に相当する。早期に受ければ、長期にわたって眼鏡やコンタクトレンズが不要になる。視力の悪化が進行中の場合、手術できないケースもあり、特に10代は注意が必要だ。また、角膜の厚さによっては、1回の手術しか耐えられない人もいる。

眼鏡やコンタクトレンズの利用者は一説には4千万人も。3人に1人が視力の問題を抱えていることになる。

手術は20分

視力矯正はレーシック、有水晶体眼内レンズ手術、オルソケラトロジーがあり、いずれも健康保険は適用されない。代表的なのがレーザーで角膜を削るレーシック。アメリカで1980年代に始まった。日本で年間に手術を受けた目の数は約30万に上る。照射するレーザーは視神経などには影響しない。目の表面をレーザーで削り、薄いフラップ(ふた)を作り、角膜を削る手法と、フラップを作らず直接レーザーを当てていく方法がある。前者は痛みが比較的少ない。

費用はコンタクト5~10年分 手法やリスク聞いたうえで決断

視力回復も早いのが、一定の角膜の厚さが必要。フラップを作らない方法は痛みが強いが、角膜の厚みが十分でない人や目への衝撃が考えられる格闘技の選手らに向いている。手術時間は15分から20分程度。点眼麻酔を受けた後、「開眼器」で上下のまぶたを開いた状態で固定し、フラップを作り、レーザーを数秒程度照射する。

十分に検査

年間約750件の手術

術前後の検査。施設によってさまざまだが、同クリニックは、手術前に虹彩や水晶体の前に固定する。オルソケラトロジーは、就寝中に特殊なコンタクトレンズを装着し、角膜の形を一時的に矯正し、日だけ視力を回復させる。

次回7月21日

悪くなった視力を回復するには

主な裸眼の視力矯正法

	レーシック	有水晶体眼内レンズ手術	オルソケラトロジー
特徴	一度手術をすれば、コンタクトや眼鏡を必要とせずに過ごせる。症例が多いので、他の手術に比べて安心感がある	レーシックが困難な、強度の近視や、角膜の厚さが足りない人に適している	手術の負担がないため、手術が不安な人や、年齢的に手術ができない人なども選択できる
短所・リスク	削るための角膜の量が十分無い人はできず、手術回数に限度がある まれに光の見え方などが変わること	21歳未満はできない 眼内の手術で、現時点でできる場所が少ない	通常のコンタクトと同様、ケアに手間がかかり、合併症のリスクも同様にある 米国などでは一般的だが、日本では行っていない施設が少ない
費用(両眼)	手術代10万~30万円程度	手術代60万~80万円程度	治療費用やレンズ代でおおむね10万~20万円程度

レーシック手術にはどんなリスクが伴うのか。よい施設はどのように選ぶべきだろうか。

日本眼科学会(事務局・東京)によると、レーシック手術を受ける人のうち、90%以上が裸眼視力が1.0以上に回復するという。そのほかもおおむね0.8や0.9で一般生活には支障ないことがほとんどだ。

再手術のケースは数%程度ある。見え方や視力の戻りには個人差があり、微調整にはあらためて照射する。まれに近視への戻りやフ

施設選びの注意点

ラップのずれ、角膜潰瘍などの合併症が起きることがある。海外の論文では、手は消毒できないという話。「若い人は視力を大きく上げたい」として、手術前に行った検査が、実は1.0で、通常は清潔な環境で消毒は数千分の1程度。眼科医や術後に複数回の検査を行い、適切な処置があれば、重大な病状になる危険は、ほとんどないという説明がある。

まれに再手術や合併症 術後もきちんとして検査を

性はない。そのためにも、術後の検査をきちんとしていく施設を選ぶことが重要となる。

同学会の庶務理事で、筑波大学の大鹿哲郎教授(眼科)は、「値段が安くても、手抜きをされたら意味がない。えいへんするため、遠く

ある眼科医が紹介する施設。視力低下は病気の可能性もあるため、各学会などが「閉鎖」が衛生管理を怠り、感染症で患者に視力障害が生じた事件がある。元院長が業務上過失傷害の罪に問

2008年から09年にかけて、レーシック手術のガイドラインを改訂。専門医向け講習会の回数を増やし、合併症実態調査の実施などを進めたりして

スという。この事件を受けて、レーシック手術のガイドラインを改訂。専門医向け講習会の回数を増やし、合併症実態調査の実施などを進めたりして

記者ひとこと

角膜OK。あとは費用の問題...

高校時代、裸眼で白球を追っていた思い出がある。その後の受験勉強で急速に視力が低下して以来、いくつもの眼鏡を買い替えた。今、使い捨てコンタクトレンズ無しには怖くてグラウンドに立てない。取材前に抱いていた、レーシックへの根拠なき不安はほとんど解消された。数年前まで私と同じ視力だった女性が、「左右2.0」の視力を取り戻し、「スポーツも楽しんでいます」と生き生きと語るのに、私も心が揺らいだ。取材した診療所で適応検査を受けたところ、記者の角膜は「レーシック可」。あとは決断のみだ。肝心な点を忘れていた。数十万円の費用と家族の了解だ。「眼鏡」から解放された記者を見たくないですか。その問い掛けがまだできない。

510